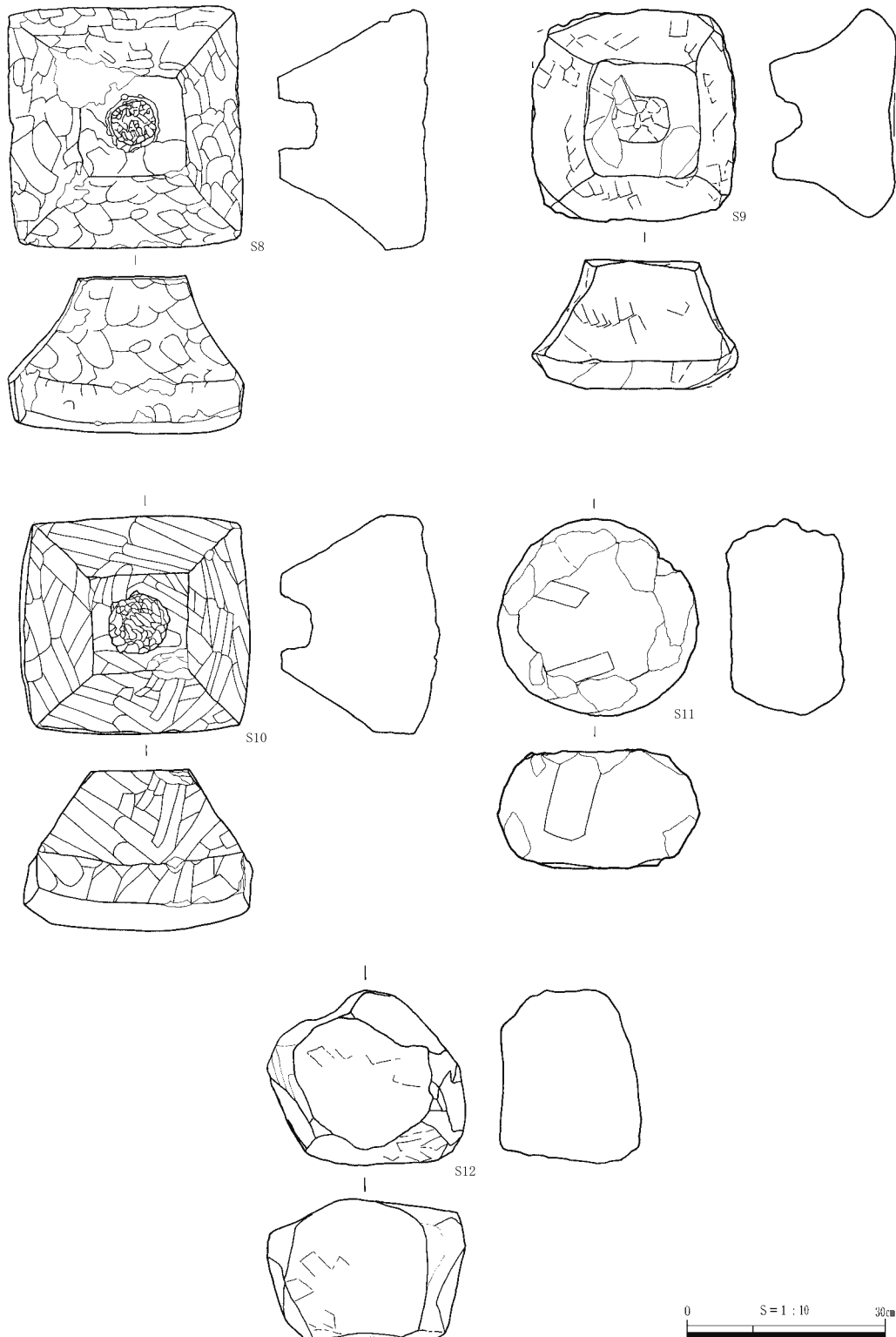


第151図 SD15出土遺物(1)

SD15(第150～152図、PL25・26・50・51・65)

4区中央部のG6、H6、I6、J6・7、K6・7、L6・7グリッドにまたがり、標高57.1～58.9 mの緩やかに西側へ傾斜する斜面部に立地する。検出面は、東側はハードローム層、西側は谷部堆積層である。周辺は圃場整備によって削平が著しく、東側の屈曲部は約1 mの段差となっている。また、東側は近現代の耕作に伴う溝が埋土上層を掘り込み、中央部分近現代の用水路であるSD14によって掘り込まれている。西側は現代の用水路によって分断されているが、延長部分は後述する新SD18



第152図 SD15出土遺物(2)

に接続するものと考えられ、一連のものとして理解できる。

検出した範囲では、東西長58.4m、南北長6.4m、幅2.4～3.2m、深さ16～60cmを測り、東西方向の方位はN-80°-Eとなる。断面形は逆台形状を呈する、いわゆる箱堀である。上縁部の一部が二段に加工された箇所がある。底面レベルは東側が高く、緩やかに西側へ傾斜している。底面の標高は、東側で58.4m、西側で56.8mである。東側のG6グリッド付近で直角に折れ曲がることを確認したが、前述のように圃場整備により掘削されているため、遺存状態は悪い。

埋土は、掘り込まれている土質により東西で異なり、東側はロームを含む黒褐色土から黒色土系が主体で、最下層は暗褐色土系である。西側は谷部堆積土に掘り込まれるため粘質の黒色土系が主体である。埋土の土壌理化学分析により、少なくとも西側部分では、底生種の珪藻化石が検出されており、地形が示すとおり湿地環境で、滞水の状況であることがわかった(第4章参照)。

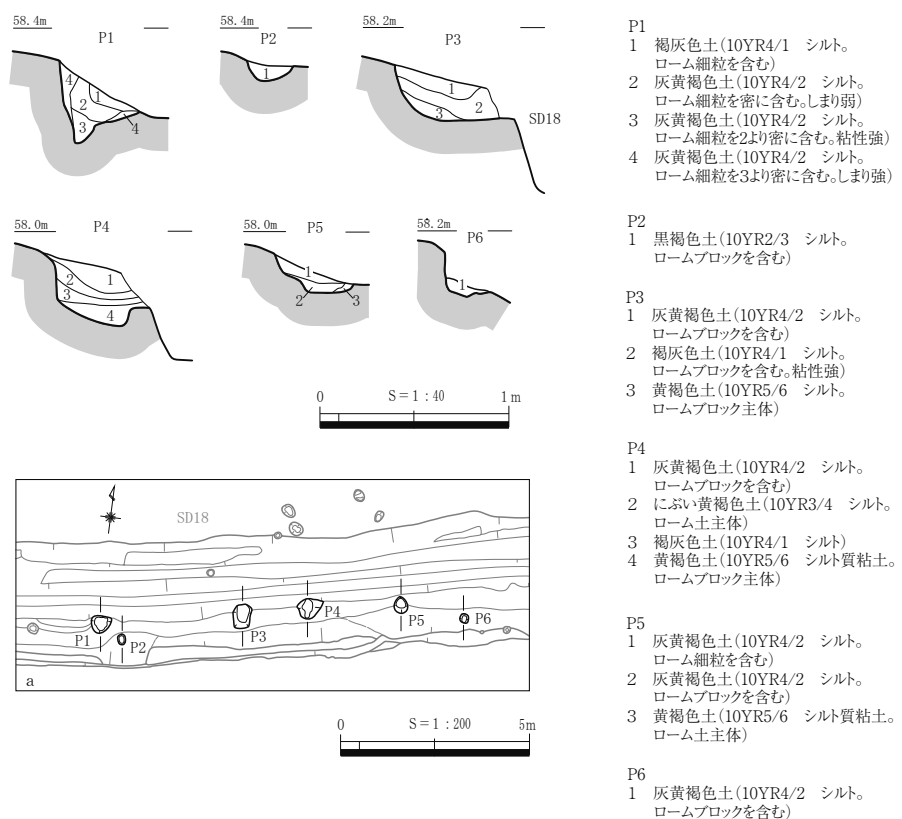
出土遺物は、いずれも埋土中からの出土で、弥生土器甕188、土師質土器坏189～196、土師質土器小皿206、土師質土器羽釜207、土師質土器鍋208・210、土師質土器鉢200、須佐焼播鉢201～204、白磁皿205、常滑焼壺206、土玉207～209、椀形鍛冶滓F52～F59、被熱石F60、黒曜石製石鏃S7、桶底W34、火輪S8～S10、水輪S11、地輪S12がある。これらの遺物のうち、埋土上層の遺物202～204、五輪塔は近世以降のもので、土層断面の観察の状況を示している。

遺構の時期を示すものは土師質土器類、常滑焼である。土師質土器は、八峠編年中世V期に相当するものと考えられ、15世紀ごろのものと考えられる。SD18とともに居館の南側を区画する堀としての機能が考えられる。

SD18(第153～155図、PL27・28・51・61・65)

3区南側に位置し、標高58.5m前後の丘陵上に立地する。屋敷地の南側を区画する堀と考えられる。同一位置での掘り返しが一度みられ、新旧(古SD18、新SD18)の2時期に分けることができる。新SD18が、4区のSD15に対応し、一連の遺構と考えられる。

古SD18 検出した長さは62mで、方位はN-81°-Eである。東西に直線状に延びるが、東端では南側にL字状の細い溝が分岐する。東、西端とも調査区外へ延びており、西端は1区が位置する丘陵斜面へと抜



第153図 SD18内ピット



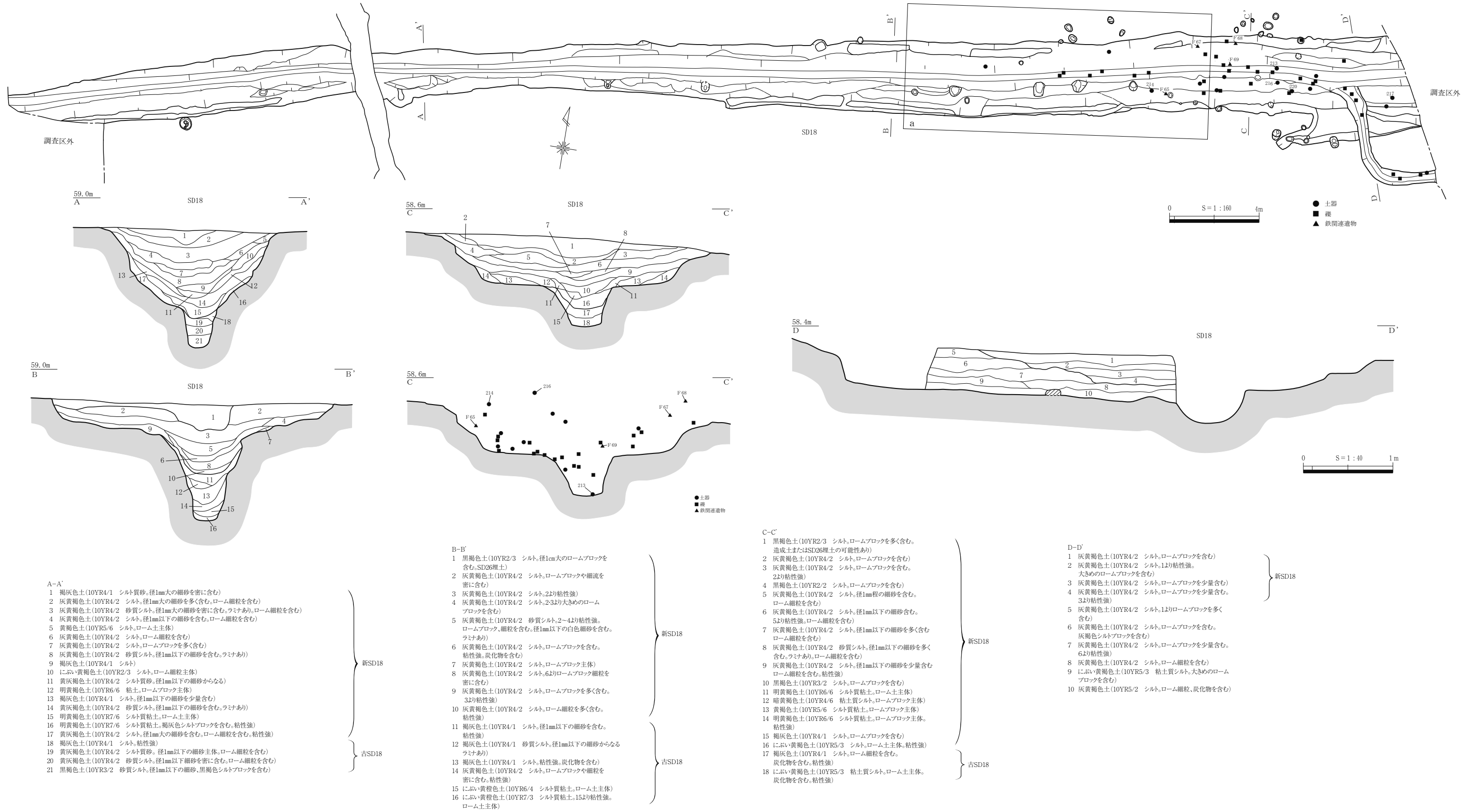
第154図 SD18出土遺物

ける可能性が高い。東端については延長部分にあたる4区では確認できないことから、3区と4区の間で途切れると考えられる。発掘調査により、調査区中央に浅い谷地形が入り込むことが判明しており、東端はおそらく、その谷地形の肩部までと考えられる。幅は上部に新SD18が重複するため明らかではないが、壁面の立ち上がりから復元すると1.5m前後と予想できる。深さは最大1.3mほどで、断面形はV字状を呈する。底面の幅は20～30cm前後と狭く、底面には掘削の際の工具痕とみられる細かい凹凸が残る。底面での標高は東端から土層断面A-A'付近までが57.3mとほぼ一定であるのに対して、西端は56.9mで、堀の西側1/4程度が西側へ下っている。

埋土は下位のみを確認し、東半はシルト層が主体となるが、西半ではシルト質砂や砂質シルトが堆積し、ラミナもみられる。珪藻分析では淡水・底生種が卓越していることが判明しており(第4章)、滞水や流水があったことが窺われる。地形が北側に向かい低くなることから、雨水等が屋敷地内へ流入するのを防ぐ役割を果たしていた可能性がある。

古SD18に伴う遺物は、東側の底面直上から瓦質土器鍋213が1点出土しているのみである。

東端で分岐するL字状の溝は、幅が55cm、深さは50cmである。壁面の立ち上がりは急で、埋土中



第155図 SD18

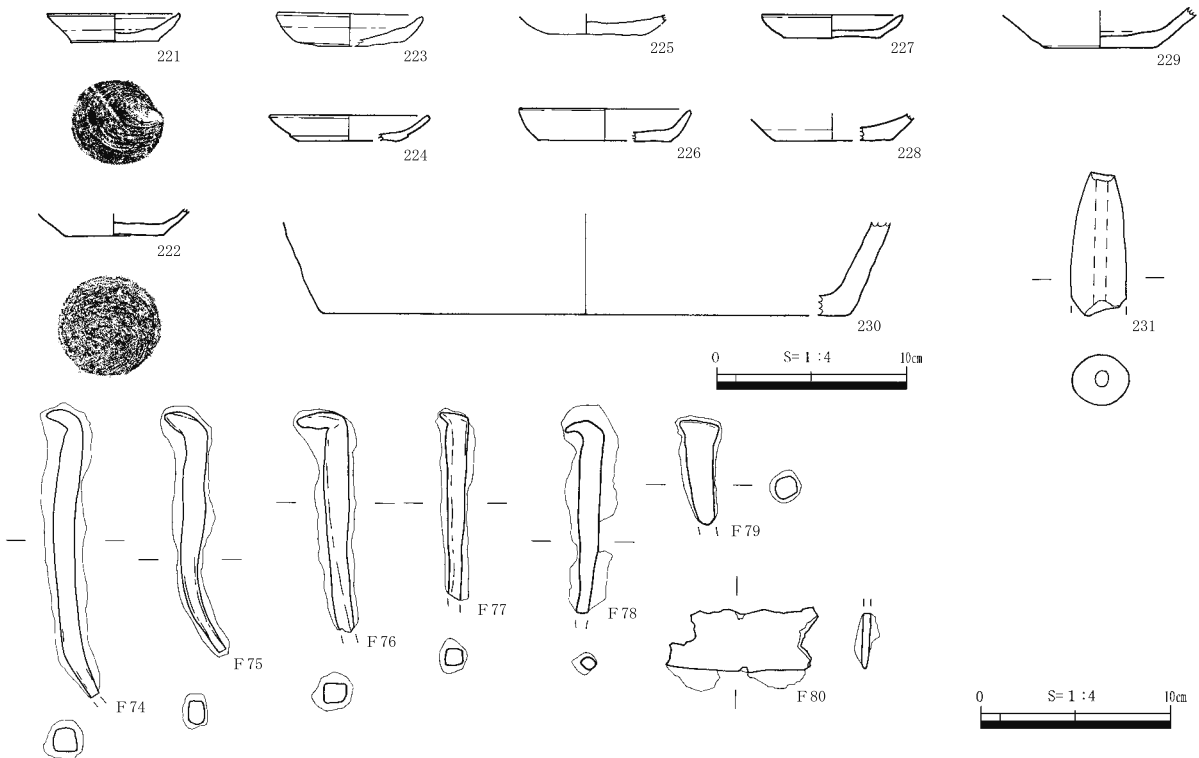
から、拳大の礫の出土が目立つ。古SD18の本流との間、幅2mほどの狭小な範囲を区画する溝と考えられるが、範囲内で柱穴等の遺構は検出できず、区画の対象は不明である。

**新SD18** 検出した長さは62mである。SD15と合わせると全長が130mを超え、掘り直した際に全長を2倍程度に延長したと考えられる。方位はN-81°-Eである。幅は、東側が3.3m、西側が1.26~2.4mで、西側がやや狭くなっている。深さは0.6m~1mで、断面形はやや歪な部分もあるが、概ね逆台形状を呈する。東側の底面でピットが散見されるが、柱痕跡もなく、規則的は配置も窺われない。底面での標高は東端が57.6m、中央付近が57.8m、西端が57.3mで、中央付近を最高所とし、東西の両側に向かって傾斜する。

埋土は、旧SD18と同様に東半はシルト層が主体であるのに対して、西半はシルト層とシルト質砂、または砂質シルト砂が互層状に堆積し、ラミナを含む層も目立つ。滞水と流水を繰り返しながら埋没したと考えられ、珪藻分析では古SD18と同様に淡水・底生種が卓越する(第4章参照)。また、土層断面A-A'では北側からローム土が僅かずつ堀内に流入した痕跡(5・7・10・12・15・16層)を確認できる。本遺構に沿った北側の一定範囲内で同時期の遺構が確認できないことも勘案すると、本遺構は内側に土塁を併設していた可能性がある。

出土遺物は少なく、東側に集中する。211は土師質土器小皿である。214は受け口の瓦質土器鍋で、215は須恵器瓶底部片、216は土師質土器羽釜である。217は白磁皿Ⅸ類、218は同安窯系青磁碗Ⅰ類、219は瀬戸窯製品の平椀で、藤沢編年古瀬戸様式後期Ⅱ期に該当する。212・220は勝間田・亀山系甕で、220は口縁端部直下から頸部にかけての外表面が僅かに盛り上がる形状をなす。F61は炉壁で、製錬炉、もしくは精錬鍛冶炉のものと考えられる。F62は羽口、F63~F70は椀形鍛冶滓、F71・F72は鉄釘、F73は铸铁製鍋の底部破片の可能性があり、S13は黒曜石製石鏃で、混入品である。

遺構の時期は、古SD18から出土した瓦質土器鍋213が八峠編年中世Ⅲ期に相当し、13世紀から14世紀初頭と考えられる。新SD18は瀬戸窯製品の平椀が最も新しい時期を示すことから、堀は14世紀後



第156図 SD 8 出土遺物

半から15世紀初頭には再掘削されていたと考えられる。

## 8 区画溝

### SD8 (第156・157図、PL.20・50・61)

3区北東部のS2・3、T2・3グリッドにあり、標高56.5mの平坦面に立地する。東西に直線状に延びる素掘りの溝である。

全長は12.4mで、方位はN-80°-Eである。平面形は長さ3~4mの長楕円形の土坑3基を浅い溝で連結したような形状を呈する。北側の肩部は比較的直線状になっているのに対して、南側の肩部は出入りが著しい。幅は0.5~1.7mと一定しない。深さは0.18mほどで、東端と西端で底面に高低差はない。

埋土は2層に分かれ、いずれも焼土粒や炭化物を密に含む。

遺物は埋土中から土師質土器小皿 221~227、坏228・229、瓦質土器火鉢230、土錘231、鉄釘F74~F79、刀子F80が出土している。鉄釘はいずれも小型の皆折れ釘で、大きさが比較的揃っており、SB14など周囲の建物に使用された釘と考えられる。

土師質土器は、八峠編年中世Ⅲ期に相当し、13世紀から14世紀前半と考えられる。本遺構はSB14の桁方向に平行し、出土土器も時期差がない。よって、SB14に関連する遺構と考えられ、形状から雨落ち溝というよりはむしろ、建物を区画する溝の可能性が高い。

### SD9・10・11 (第158~160図、PL.50)

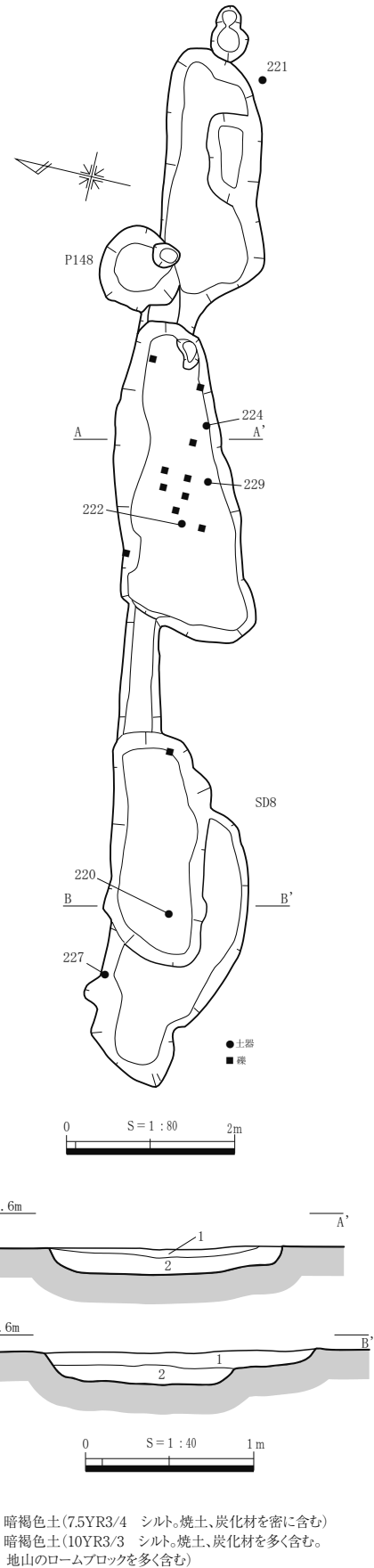
3区北東部のS2グリッドの調査区壁際にあり、標高56.4mの平坦面に立地する。SD9・10・11の3本の溝は重複している。SD9とSD11は接続するように検出しており、一連のもの可能性がある。

SD9は、北側は調査区外に延びる素掘りの溝である。SD10と重複しているが、土層等の観察によりSD10に後出すると判断した。平面形は、やや弧状を呈するが、遺構の重複や検出範囲が僅かであることから全形は不明である。検出した長さは0.7mで、幅1.0mを測る。深さは0.1mほどと浅い。

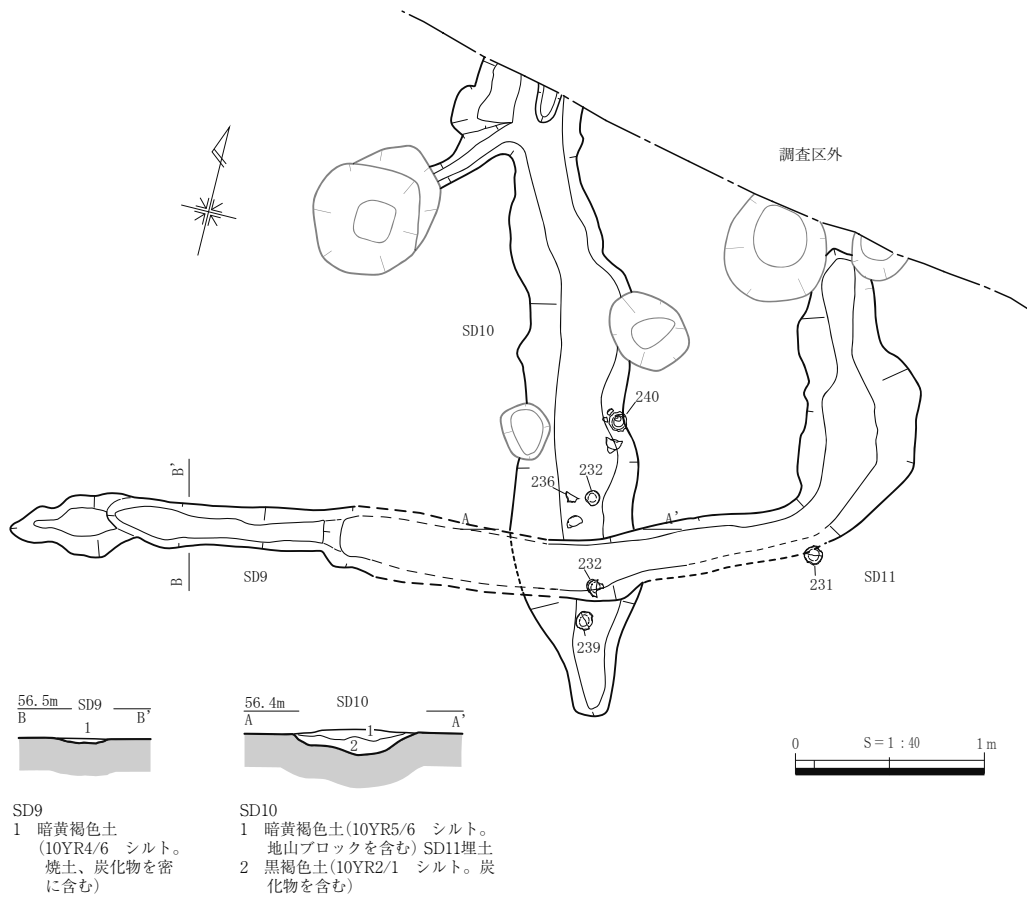
埋土は、単層で炭化物、焼土を含む暗黄褐色土である。

埋土中から、土師質土器坏232が出土している。

土師質土器は、八峠編年中世Ⅲ期に相当し、13世紀から14



第157図 SD8



第158図 SD9・10・11

世紀前半と考えられる。SD10、11と同様に建物の区画溝、もしくは雨落ち溝の可能性はある。

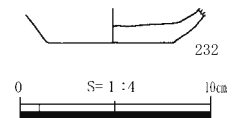
SD10は、南北に直線状に延びる素掘りの溝で、SD9・11と重複しているが土層等の観察によりSD9・11に先行すると判断した。方位はN-19°-Wである。検出した長さは3.7mで、北端は調査区外へと延びる。幅は0.24～0.64mと一定しない。深さは0.14mと浅く、断面形は皿状を呈する。

埋土は単層で、焼土粒や炭化物を多く含む。

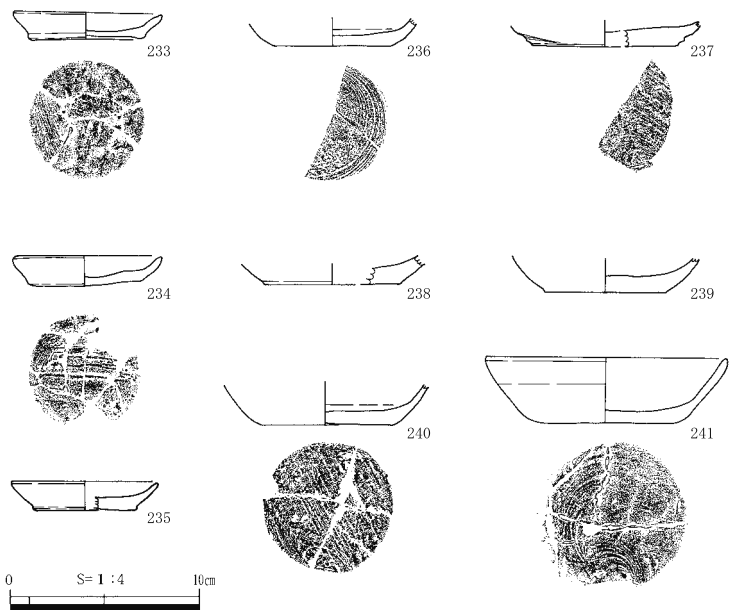
遺物は、南端付近の埋土中から土師質土器小皿233～235、坏236～241が出土している。

土師質土器は、八峠編年中世Ⅲ期に相当し、13世紀から14世紀前半と考えられる。SD9、11と同様に建物の区画溝や雨落ち溝などの可能性はある。

SD11は、SD10と重複しているが、



第159図 SD9出土遺物



第160図 SD10出土遺物

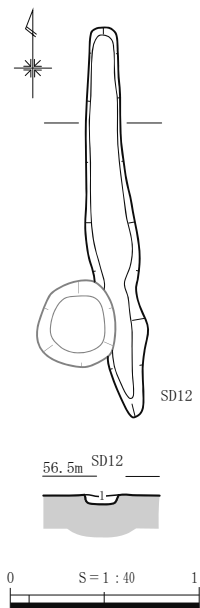


土層等の観察からSD10に後出すると判断した。平面は、L字状を呈する素掘りの溝で、全長は5.75m、方位はN-77°-Eである。幅は0.2~0.6mと一定しない。深さは0.05~0.1mと浅く、断面は皿状を呈する。

埋土は、SD9と同様の暗褐色土系の埋土で、焼土粒や炭化物を多く含む。

遺物は屈曲部の肩部付近から土師質土器坏片が出土しているが、図化できなかった。

時期は、出土土器から13世紀から14世紀初頭と考えられる。SB14とは近接しすぎることから同時期の遺構とは考えにくい、SD9、10と同様に周囲の柱穴群からなる建物の区画溝、もしくは雨落ち溝であった可能性が高い。



SD12(第161図)

3区北東部のT2グリッドにあり、標高56.4mの平坦面に立地する。

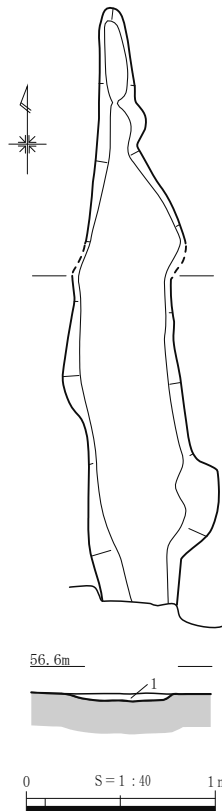
南北に直線状に延びる素掘りの溝である。方位はN-4°-Wである。全長は2.1mで、幅は0.18~0.28mと狭い。深さは0.05mと浅く、断面形は逆台形状を呈する。

埋土は、単層で炭化物や焼土粒を多く含む暗黄褐色土である。

遺物は出土していないが、埋土の特徴から13世紀から14世紀前半と推定される。周囲に存在するとみられる建物群の区画溝や雨落ち溝などの可能性がある。

1 暗黄褐色土(10YR4/6シルト。焼土、炭化物を密に含む)

第161図 SD12



SD13(第162・163図)

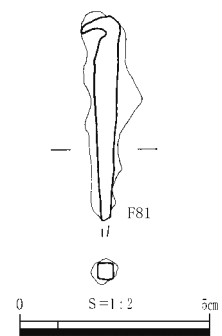
3区北東部のT2グリッドにあり、標高56.4mの平坦面に立地する。

南北に直線状に延びる素掘りの溝である。方位はN-4°-Wである。検出した長さは3.15mで、南端はSK19に壊されている。幅は0.16~0.70mと一定しない。深さは5cmほどと浅く、断面形は皿状を呈する。

埋土は、黄褐色土が単層で入る。

遺物には、埋土中から鉄釘F81が出土している。

時期を特定できる遺物は出土していないが、検出層位及び周辺の遺構検出状況から、13世紀から14世紀前半と推定される。周囲に存在するとみられる建物の区画溝や雨落ち溝の可能性はある。



第163図 SD13出土遺物

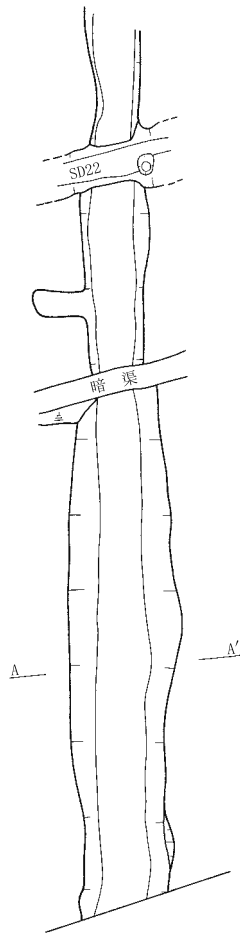
1 黄褐色土(10YR6/8シルト。地山ロームブロック主体)

第162図 SD13

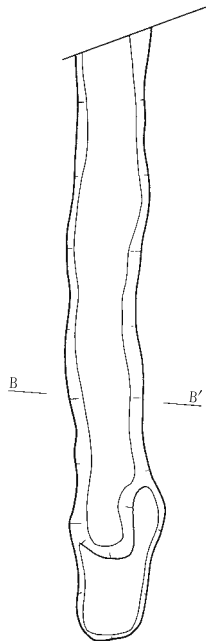
SD21(第164・166図、PL.29・51・65・66)

4区北西側北側M3・4・5グリッド周辺にあり、谷部堆積土中の標高56.5~56.9mのほぼ平坦面に立地する。

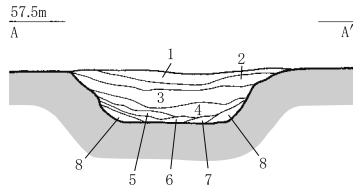
本遺構は、直線状にほぼ南北に延びる断面形が逆台形状を呈する溝で、長さ19.6m以上、幅0.46~1.16m、深さ10~62cmを測る。底面の標高は、南端部で56.8m、北端部で56.3mとなり、緩やかに北側へ傾斜している。溝北側は、調査区外へ延びる。SD15とは、ほぼ直交する位置関係にある。



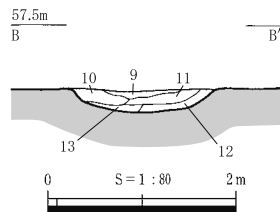
排水路



0 S=1:160 4m

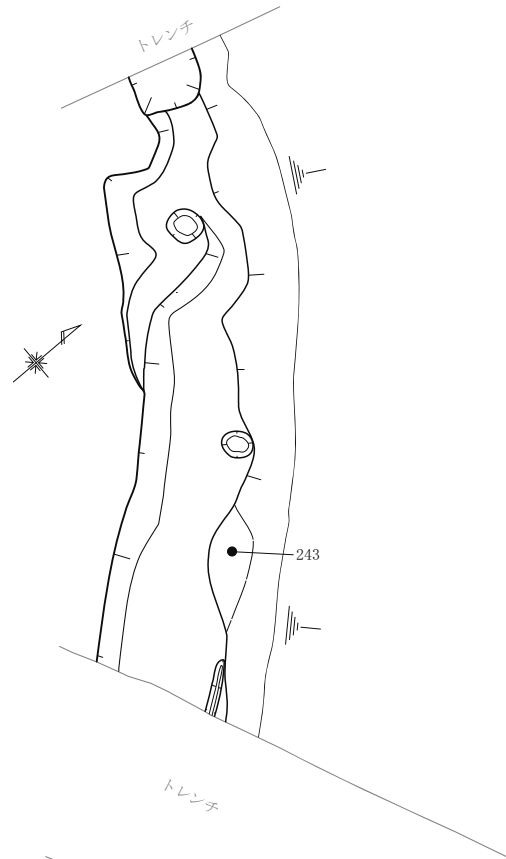


- 1 暗褐色土(10YR4/3 1cm以下のロームブロック含む)
- 2 にぶい黄褐色土(10YR5/4 1cm以下のロームブロック多量に含む)
- 3 暗褐色土(10YR3/3 1cm大のロームブロック多量に含む)
- 4 黒褐色土(10YR2/2 粘質、1cm大のロームブロックわずかに含む)
- 5 にぶい黄橙色土(10YR6/4 粘質)
- 6 灰黄褐色土(10YR4/2 粘質)
- 7 褐色土(10YR4/4 シルト質)
- 8 明黄褐色土(10YR6/6 均質。シルト質)
- 9 黒色土(5YR1.7/1 しまり、粘性有。1cm未満のロームブロックごくまれに含む)
- 10 黒色土(10YR1.7/1 しまり、粘性有。鉄分含む)
- 11 黒色土(7.5YR2/1 しまり、粘性有。1mm以下の地山粒まれに含む)
- 12 黒色土(7.5YR1.7/1 しまり、粘性やや有。1mm未満の地山粒ごくまれに含む)
- 13 黒色土(7.5YR1.7/1 しまりやや有。シルト質)

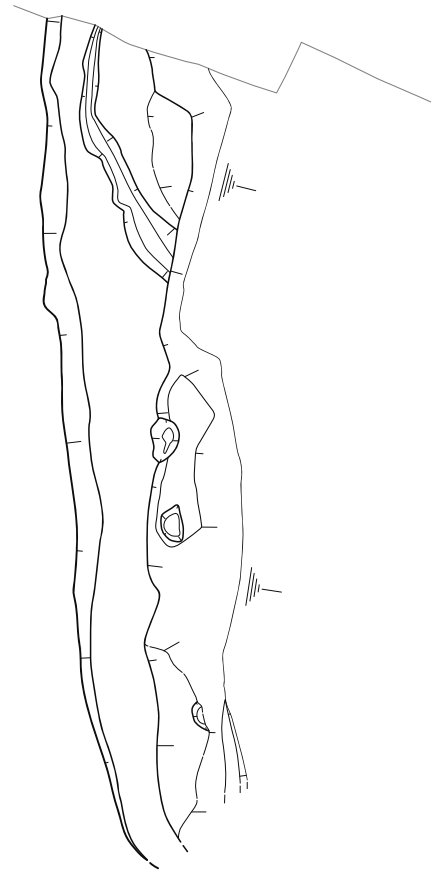


0 S=1:80 2m

第164図 SD21



トレンチ



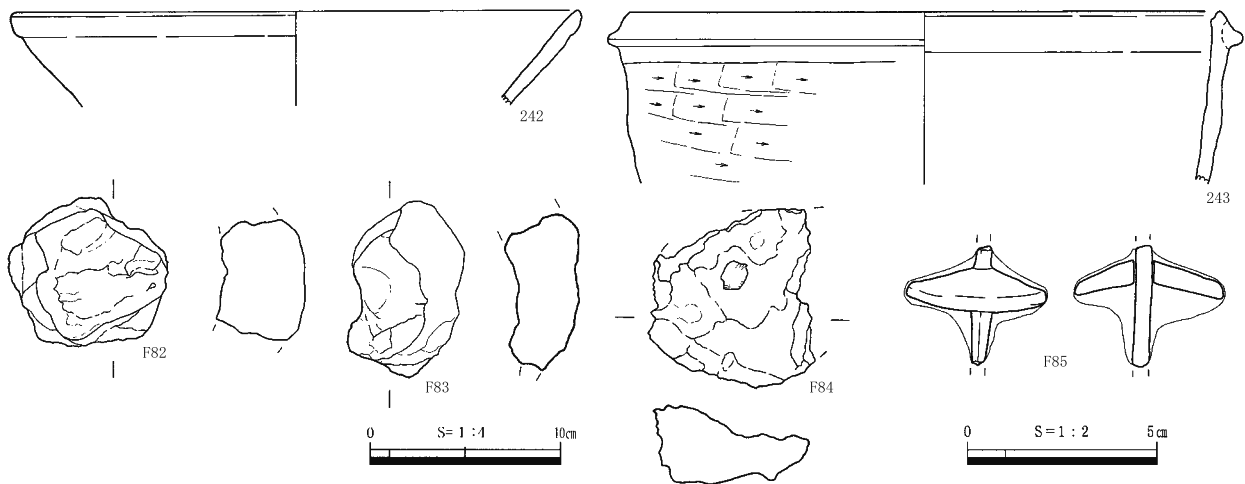
0 S=1:80 2m

第165図 SD17

埋土は13層に分層できた。谷部堆積土中を掘り込んでいる箇所では黒褐色土系の埋土で、ローム層を掘り込んでいる箇所では暗褐色から黄褐色土系の埋土である。

出土遺物には、瓦質土器鉢242、瓦質土器羽釜243、椀形鉄滓F82～F84、鉄製紡錘車F85を図化した。242は、北側底面で破損した状態で出土している。その他は埋土中から出土している。

出土遺物から、15世紀ごろのものと考えられる。断面の形態が居館を区画するSD15に類似すること、またSD15に直交することから、屋敷地内を仕切る溝であったものと考えられる。



第166図 SD21出土遺物

## 9 その他の溝

### SD17(第6・165・167図、PL.50・65)

3区東側のQ4・P5グリッドにあり、標高57.2mの谷地形へと下る斜面の肩部に立地し、2-1層上面から掘り込まれる。

地形に沿って南東から北西方向にやや蛇行しながら延びる素掘りの溝である。東側の肩部は重複する近世以降のSD16によって壊され遺存していないため、幅は不明である。検出した長さは17mで、南北の両端は削平されている。深さは60cmほどで、断面形は逆台形状を呈する。

埋土は3層確認でき、褐色系のシルトで流水の痕跡は窺えない。

遺物は、埋土中から土師質土器小皿244・245、勝間田・亀山系甕246、備前焼播鉢247、椀形鍛冶滓F86が出土している。土師質土器小皿は底部回転糸切り後圧痕が残る。

本遺構は、層位から15世紀から16世紀初頭以降と考えられる。

### SD19(第168図、PL.30)

4区西側のJ7～9グリッド、標高57.8～57.6mのほぼ平坦面に立地する。北端・南端でそれぞれピット群7のP32・33が重複する。

ほぼ南北方向に延びており、長さ8.5m、最大幅0.45m、検出面からの深さは、およそ30cmを測る。断面形は逆台形状を呈するが、溝の西側が東側よりやや深くなる。

埋土は2層に分けることができるが、2層はごく薄いものであり、遺構の大部分は1層で埋まって

いる。

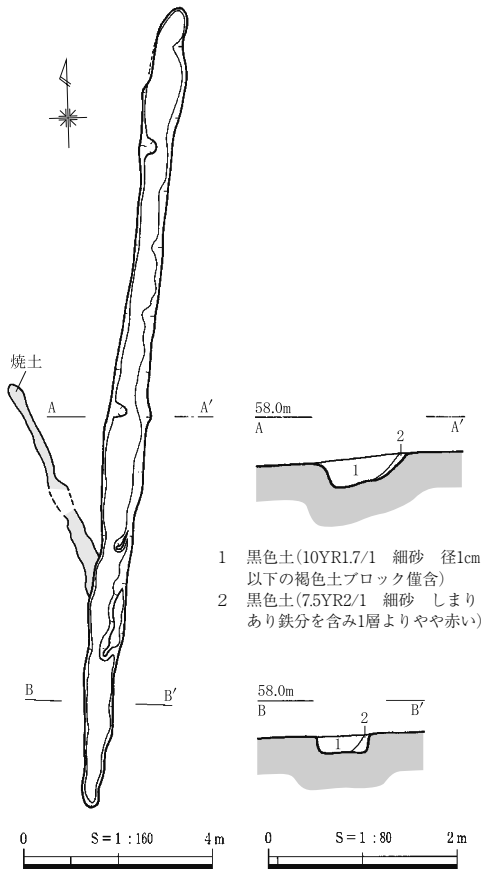
遺物は出土していないが、弥生時代から中世の遺物を包含する層である黒色



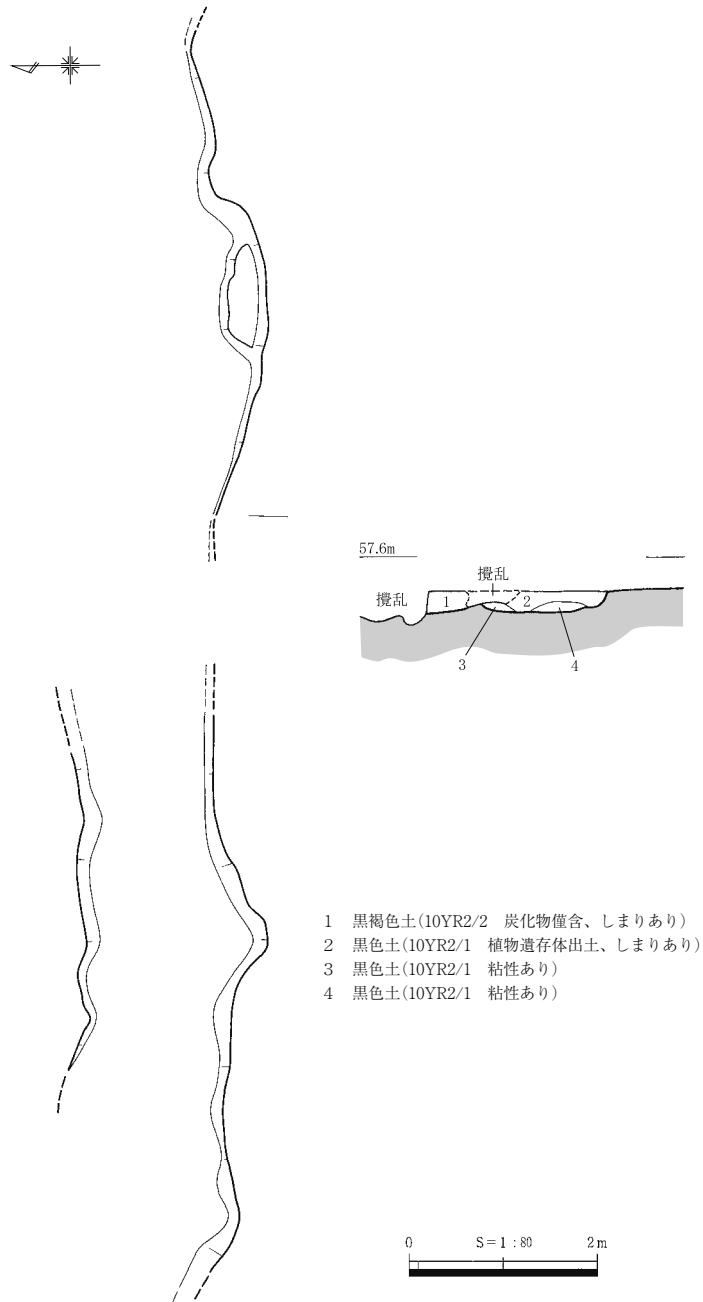
第167図 SD17出土遺物

土を掘り込んでいることから、本遺構は中世以降に属するものと考えられる。

なお、本遺構に交差するように分布する焼土が検出された。焼土周辺に被熱の痕跡は見られず、検出した焼土自体も焼けしまっていないこと、平面形が明確でないこと、断面観察の結果が黒褐色土に焼土ブロックが含まれるような状態であったことから遺構ではなく、二次堆積土したものと判断した。



第168図 SD19



- 1 黒褐色土(10YR2/2 炭化物僅含、しまりあり)
- 2 黒色土(10YR2/1 植物遺存体出土、しまりあり)
- 3 黒色土(10YR2/1 粘性あり)
- 4 黒色土(10YR2/1 粘性あり)

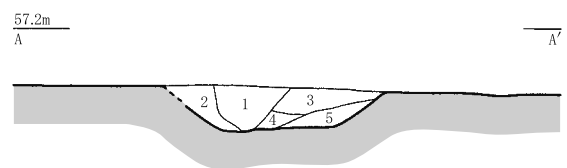
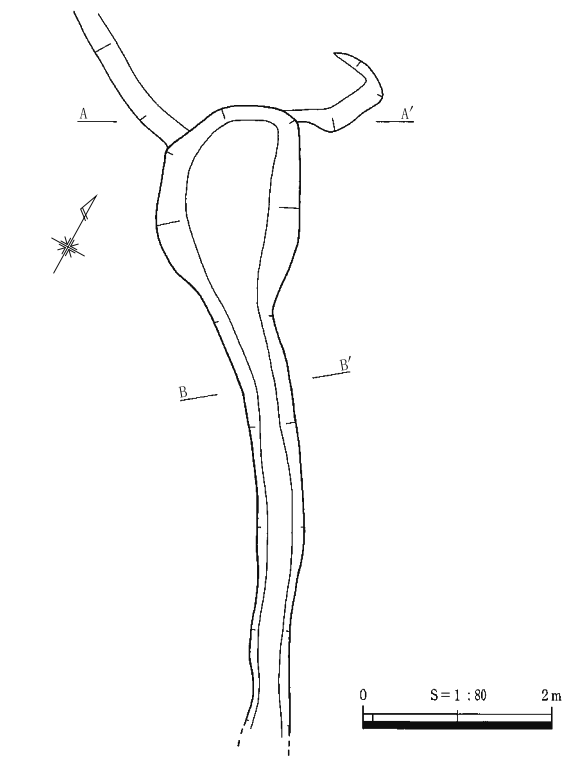
SD20(第169図、PL.30)

4区西側のK7・L7グリッドにあり、西側は調査区外へ延びる。標高は57.1～57.3m付近、中世の遺物包含層である黒色土中で検出した。本遺構を切る関係でSD14が東側と北側に、またSD15が北側に近接する。黒色土中で検出したため、形状が不明瞭な部分もある。

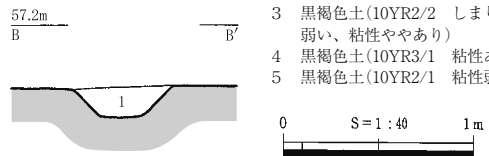
SD15に平行するように直線状に延び、長さは26.4m、幅2.72～3.76m、深さは最大0.48mを測る。主軸はほぼ東-西で、南壁東側にはテラス状部分が認められる。断面形は浅い皿状を呈し、底面は平坦である。

埋土は黒色土を主体として3層確認できた。ベルト部分では、近世以降のSD14に切られていることが確認できた。埋土中に木の枝などの植物遺存体が出土していたことから、水漬かりの状況で埋没していたことが想定される。

本遺構の正確な時期は不明であるが、層位から中世以降に位置づけられる。性格は不明である。



- 1 黒褐色土(10YR3/1 しまりやや弱い)
- 2 黒褐色土(10YR2/2 径5mm以下の地山粒含)
- 3 黒褐色土(10YR2/2 しまりやや弱い、粘性ややあり)
- 4 黒褐色土(10YR3/1 粘性あり)
- 5 黒褐色土(10YR2/1 粘性弱い)



第170図 SD24

SD24(第170・171図、PL.30・51・65)

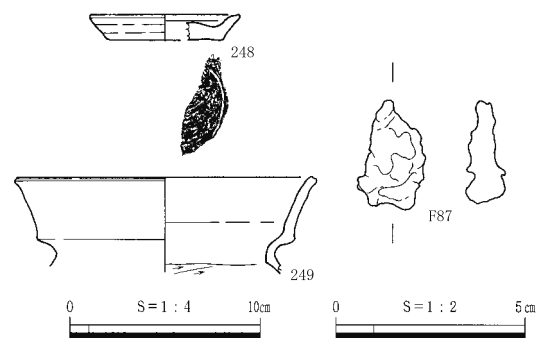
4区K6グリッド、標高56.7～56.9mの平坦面に立地し、SD21の南半に並行する。

長さ6.7m、最大幅1.5m、検出面からの深さ24cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。

幅が狭い溝の南側部分では埋土は1層、幅が広くなる北側部分では5層に分層できる。いずれも基盤層である黒褐色土層によく似た埋土となっている。

出土遺物には、埋土中から出土した土師質土器小皿248、土師器甕249、鍛冶滓F87がある。249は古墳時代前期のもので、混入したものである。

出土遺物のうち、土師質土器は八峠編年中世Ⅲ期に相当し、本遺構は、13世紀から14世紀初頭に位置づけられる。性格は不明である。



第171図 SD24出土遺物